

# 寢宿婚と婚舎をめぐる民俗研究

——大間知・有賀論争の再検討——

八 木 透

## 一、問題の所在——大間知・有賀論争の民俗学的意義

今日までの数多い民俗学研究の成果の一つに、かつての民俗社会においては、若者と娘の比較的自由な性交渉から婚姻関係へ発展していった例が少なからず看取できることを明らかにしたことがあげられよう。しかし、婚姻前の若者たちの性交渉がその後どのようなプロセスを経て婚姻関係にまで発展していったのかについては、詳細な報告は少なく、理論分析もあまり行われていない。ここで考えなくてはならないことは、かつての民俗社会において、何をもって婚姻の成立と解釈されていたのか、さらに、婚姻成立以前の性交渉に対してどのような社会的価値観が付与されていたのかという問題についてである。性と婚姻とは常に不可分の関係にあるが、その相関性を普遍的に捉え、明晰な理論化を行うことはきわめて困難な作業であろう。しかし、民俗事例にもとづいて、かつての民俗社会における婚姻観および貞操観の分析を試みることは、この命題に接近する一つの布石となりえよう。そこで本論文においては、この難題を分析する糸口として、まず「寢宿」に関する問題を取り上げたい。寢宿とは、いわゆる若者宿、娘宿が彼らの寝所にあてられている場合の名称で、若者仲間の結束が強く、また彼らに一定の社会的権限が与えられている共

同体において、広くみられる民俗事象である。寢宿についてはこれまで種々の解釈が提示されてはいるが、いずれにしても寢宿が若者たちのヨバイの舞台となるケースが多かったことは誰もが認めるところである。よって、上記の問題を考察する際、寢宿をめぐる民俗は格好の題材といえるのである。

今日の民俗学の専門用語の一つに「婚舎」という言葉がある。一般には、「婚姻の開始もしくは成立に伴い、新婚者のために用意される部屋・建物」<sup>①</sup>と解釈されているが、未だ明確な定義づけはなされていない。すなわち、「婚姻の開始」さらに「婚姻の成立」を何時と捉えるかが明確にされない以上、必然的に婚舎の定義づけも曖昧にならざるをえないのである。この問題に端を発し、「寢宿」の解釈に関して真っ向から対立したのが大間知篤三と有賀喜左衛門であり、この両者の学問的対立がいわゆる「大間知・有賀論争」である。この両者は、かたや『婚姻の民俗学』等を著し、民俗学の婚姻研究の基礎を築いた著名な民俗学者であり、かたや『日本家族制度と小作制度』・『日本婚姻史論』等を著し、同族制研究やそれにもとづく婚姻研究において偉大な業績をあげた社会学者であっただけに、二人の論争が各学会に与えた影響は計り知れないものがあつた。論争は大間知が「日本結婚風俗史」において、薩摩の甕島や長門の見島などで、寢宿が婚礼後の婚舎にあてられている例があり、「寢宿というものがもっと広範囲にわたり、またその役割も大きかった時代には、このような婚舎としての役割がより一般的であつたのではあるまいか」<sup>②</sup>と述べたことに對して、有賀が『日本家族制度と小作制度』において、「大間知氏は、寢宿は婚舎なりとの主張を持つようであるが、これに對しては疑問を提示し（後略）<sup>③</sup>」と述べ、大間知説に疑問を投げかけたことに始まる。有賀はさらに、『日本婚姻史論』において、「新婚夫婦が小さな共同の宿に泊まることはちょっと考えられない。家に適当な別室があればそれを使う。彼らの家にはこのような部屋のない小さな家であるから、寢宿の方がましなのである。これは若者の寢宿を婚舎に流用したにすぎない」<sup>④</sup>と述べ、寢宿婚舎の例はあくまで寢宿の流用であると主張した。これに對して、大間知は「寢宿婚の一問題」という論文の中で、「寢宿から生ずる婚姻を寢宿婚と呼」<sup>⑤</sup>ぶことを主張した上

で、薩摩甕島・長門見島・伊豆三宅島・伊豆利島などにおいて、男女の婚姻成立以後も寢宿に泊まる習わしが広く存在したことを根拠として、「寢宿のもっとも大きな機能の一つは、婚姻に関するものであり、宿親というものは何よりもまず、宿子の婚姻の成立を実の親から委託されている者である。（中略）宿親が、同じ宿子たちが結婚した暁に、膝もとで婚姻の営みをつづけることを、拒まなければならないような積極的理由は乏しい。結婚を機として多くの者が寢宿を退くことは、むしろ後々の風であつたらう」と述べ、寢宿婚の存在の正当性を主張し、さらに、有賀の見解に対して「いったい『日本婚姻史論』の著者は贅入婚と嫁入婚とを、いかなる基準から区別しようとするのであるるか。いやしくも日本婚姻史論をなすに、まず第一の根本問題となるこの点が解決されていないから、以上のような幼稚な混乱が生じてくるのである」という強烈な批判を行っている。この両者の論争は、『有賀喜左衛門著作集』第六卷の「追記」において、有賀はある程度大間知説を認めながらも、こと寢宿婚に対しては、あくまでも大間知に異論を投げかけており、結局統一見解が得られることなくいつの間にかうやむやにされてしまったのである。この論争は必ずしも「寢宿婚」の問題にのみ限定されたものではなく、両者の婚姻史観そのものに根ざした奥深いものであったことは筆者も認めるところである。今ここに引用したのは両者の叙述のごく一部であり、繁雑さを避けるため多くの重要と思われる部分を割愛せねばならなかったので、不明瞭の点も多かるうが、結局両者の論争の焦点は、婚舎と寢宿の基本的理解の相違にあつたのではないかと筆者は考えている。本論文において、あえてこの論争を取り上げたのは、この論争の持つ意味を再検討し、何らかの結論を導くためには、単に両者の主張の相違を明らかにするだけではなく、はじめに述べた民俗社会における婚姻観と貞操観に関する分析が必要となることを確信したからである。そこに、大間知・有賀論争の持つ民俗学的意義が存在する。よって、次節以下では「婚舎」の理解、および「寢宿」に関する諸説を、大間知・有賀の学説を中心として、検討してみたい。

## 二、婚舎の理解とその定義

「婚舎」なる語をはじめに用いたのは柳田國男である。柳田は、「婚舎即ち若い夫婦が住む小屋」<sup>⑧</sup>あるいは「即ちどこで同棲生活を開始するかといふ、所謂婚舎の問題」<sup>⑨</sup>あるいは「私の見るところでは、誕生に産屋があり、葬送に喪屋があったと同じく、婚姻に婚舎のあることのみが會ては必要であつて」<sup>⑩</sup>などと述べ、婚舎を婚姻後の若夫婦の寝泊りする場所として理解していることはうかがえるが、婚舎を考える際にその基礎となる、「若夫婦」とはいったいどのような人たちを指すのか、何をもって夫婦とみなすかという問題については明確な定義づけは行つておらず、その結果、婚舎の定義自体も曖昧になつてしまつてゐる。「婚舎」および「婚姻の開始」、「婚姻の成立」を正確に理解し、それらの定義づけをはじめて試みたのは大間知篤三である。すなわち「私は婚舎という語を婚姻成立以後に限るのではなく、婚姻開始の時から男女がともに夜を過ごす場所という意味で使うことにしたい」<sup>⑪</sup>と定義し、「婚姻の開始」については「成立以前にすでにその男女が夫婦たるべく相許す事態を生ずるのであつて、これを婚姻の開始とみなす」<sup>⑫</sup>と述べ、さらに「婚姻の成立」を「その婚姻が何らかの形式で周囲から承認せられる時」<sup>⑬</sup>と定義している。このような「婚姻」の理解の背景には、男女の性的交渉の開始の時がすなわち婚姻が承認される時であるという一般的嫁入婚とは異なり、男女の自由な性交渉によつて始まり、若干の時を経て婚姻が正式に認められ、かつ成立するというパターンの婚姻が民俗社会には多く見られ、そこにわが国の婚姻の民俗的特質を認めんとした大間知の研究視角がうかがえる。その結果、提唱された新しい婚姻類型が「足入れ婚」や「寝宿婚」なるものであつた。筆者は、大間知の婚姻研究の意義は、「婚舎」の明確な定義づけをしたことと同時に、「婚姻の開始」と「婚姻の成立」とをはつきり區別して理解しようとしたところに存在すると考える。なぜならば、民俗社会における婚姻は、男女の個別的な性交渉の開始から婚姻として定着するまで相当期間を要するのが一般的であり、その意味において今日のように、あ

る一儀礼の挙行をもつてその婚姻の完全なる決定と定着を期待するものとは全く性格を異にしていたからである。大間知のいうように、「その男女が夫婦たるべく相許す事態を生じる」時が「婚姻の開始」だとみなすことには筆者も基本的には同意見である。若者たちは生涯の伴侶を見つるべく自由な気風の中でヨバイを続けるが、ある時期に双方の感情的接近によって個別の交際が始められる。こうなると、周囲の仲間たちもこのような二人を特別視するようになり、いわば若者たちの暗黙の承諾によって二人の結合は一步進み、より定着度の強い関係となる。相手の決まった者に強引なヨバイ行為を断行することを禁ずる規制が若者仲間の掟に含まれている例が多いことも周知のことである。このような男女の個別交際の開始がすなわち婚姻の開始とみなされるべき時なのである。しかし、大間知説にも若干問題とすべき点がある。それは、彼のいうようにしたして周囲から承認される時が婚姻の成立といえるだろうかという疑問である。民俗慣行としての「妻問い婚」においては、両者の婚姻に嫁の両親が最終的な承諾を与えるケースと、聶の両親が承諾を与えるケースとが見られ、大間知は前者を「聶入婚」、後者を「足入れ婚」と規定している。しかし、このような親の承諾というものが二人の婚姻を決定づけるにあたつてどの程度の影響力を持っていたかについては一考を要する。

例えば対馬では、娘は数えの十六歳か十七歳の霜月十五日に行われるカネツケ祝い（ハズメ祝い）を機に婚姻の有資格者とみなされるようになり、やがて聶方からの申し入れによって一応二人は夫婦たることを認められ、娘は聶家に引き移り婚姻生活を開始する。しかし、この時は全くの普段着であり、嫁入り道具などもほとんど持たずにただ身柄だけに移すのである。ゆえにこの時点における二人の関係の安定度は低く、よつてこの儀礼はさほど重要性を持たない。嫁の聶家に移り住むことが婚姻の確定だとは誰も思っていない。対馬における婚姻が確定・成立する機会は、初子の妊娠五か月目か七か月目に行われるハラマツリ（カネギトウ）とよばれる儀礼においてである。この時は、聶家に双方の親族を残らず招待して誠に盛大な宴が催されるのである。これを機に二人の関係は安定し、名実ともに夫

婦となるのである。<sup>⑧</sup> ここにおいては、婚姻の最終的な成立は親の承諾というよりも、初子の誕生を契機とする觀念が濃厚に認められる。また、かつての沖繩や八重山の島々では、きわめて自由な婚姻觀念が見られ、若者たちの接近の機会となるモーアシビ（毛遊び）という歌舞から婚姻が導かれ、親たちはその二人の關係に事後承諾を与えるのみであったという報告が奥野彦三郎や瀬川清子などによってなされている。奥野彦三郎は昭和初期に、那覇地方裁判所判事として沖繩各地の婚姻慣行の調査を実施し、沖繩の婚姻研究に偉大な足跡を残した人物である。奥野の著たる『沖繩婚姻史』の中で、かれは同地の婚姻について「歌舞と自由恋愛との間には、相互に因果關係が認められるのである。さらに換言すれば、歌舞即恋愛、恋愛即性交、性交即結婚、結婚即歌舞の關係にあったといえるのである。」<sup>⑨</sup>と述べ、歌舞を契機とした自由結婚がいかに盛んであったかを主張し、また「昔時、沖繩では自由結婚の領域がすこぶる広がったのであり、そこでは何らの儀式を経なくても、またイエの了解を得なくても、結合の当初から夫婦であり、實際にも夫婦の名称でよばれていたのである」<sup>⑩</sup>さらに「部落内の結婚において、障害となるものはほとんどない。冬のない国、黒潮のめぐる島で自由に歌い踊り、自由に結合し、いつとはなしに実を結んでいく有様は、地上の楽園そのものであった」<sup>⑪</sup>と述べ、沖繩の本来の婚姻の姿をみごとに表現している。ここにおいても、親の承諾は存在こそすれ、その婚姻の成立を決定づける要因とはなっておらず、それはむしろ婚姻の事後承諾、あるいは夫婦の通過儀礼的性格のものであったことがうかがえる。沖繩などでは、婚姻の最終的決定は、初子の誕生、もしくは聲が家持ちとなり家長となって世帯を形成する時を契機としたのではないかと思われる。以上のような事例を見る限り、婚姻の成立の時期を大間知のように、婚姻が承諾される時とすることには問題があるように思う。筆者はむしろ婚姻の成立の時期を初子の誕生や家持ちとなって自分たち夫婦を中心とする世帯を形成する時と考えたい。

一般的嫁入婚が普遍的である地域においても、新婚当初の若夫婦がきわめて流動的な立場に置かれていることが多い。その例として、羽越国境地方にみられるシュウトノツトメなる習俗があげられよう。この地方では、若夫婦が夕

食後必ず連れだつて嫁の生家へ行くというならわしがあった。「鳥が鳴かない日があつても行かぬ日はない」といわれるほどで、行つて何をするわけでもなく、ただ嫁の両親や同じように遊びにきている嫁の姉妹夫婦たちと歓談するだけであるという。子があつても行く。これを止めるのは、両親からシンシヨワタシ（寢所渡し）を受け、聶が家長に、嫁が主婦となる機会だという。<sup>②</sup>これは非常に興味深いもので、婚礼も済み、子ができてもなおシンシヨを譲られるまでの若夫婦は一定のイエに帰属しないきわめて流動的な立場を保つという、家族制と婚姻の一面を垣間見ることができるのである。

以上、大間知篤三の「婚姻の開始」および「婚姻の成立」に関する理論を検討し、この問題に対する筆者の見解を提示した。その結果として、結論的に「婚舎」を「自由な恋愛段階においてある感情的接近を契機として、特定の男女が個別交際を始める時、すなわち婚姻の開始の時から男女がともに夜を過ごす場所」と定義すべきであつて、それは「婚姻の成立」の時期とは異なる故、両者は必ず区別して捉える必要があると筆者は理解したい。

では次に、この問題について大間知とは異なつた主張した有賀喜左衛門の理論について検討してみよう。有賀は、「婚姻の開始」と「婚姻の成立」とをまったく区別しようとはせず、あくまで婚姻が承認される時が「婚姻の成立」の時であるという。すなわち「聶入婚はヨバイ婚であるから、女家に妻問うことを認められる時が結婚であつて、それ以前の恋愛の時期にはまだ婚舎はない。結婚とともに妻を問う場合に妻の部屋は婚舎になつたのである」<sup>③</sup>あるいは「親の立場からこれを見て、息子や娘の恋愛関係を許したところで、それで正式の結婚たる条件が具備されたのではなかつた。何となれば正式な結婚が行われることは許婚者にとっては結局は新しい家を成立させるか、親の家を嗣ぐことであるから、村における彼らの家の地位を確定すべき必要があつたからである。すなわちそれが彼らの生活の根拠を獲得する所以にほかならなかつたから、そのかぎりにおいて村におけるその婚姻の公認がなければ婚姻ないし家の成立は不可能であつた」<sup>④</sup>と述べて、あくまで家もしくは村から両者の関係が公認される時が結婚であつて、それ

はすなわち新しい家の成立を意味するという。有賀のいう「婚姻」とは先述の論拠にもとづいて考えると、まさに「婚姻の成立」のことを指し、大間知のように「婚姻の成立」以前に「婚姻の開始」を認めようとする視点は見られない。すなわち、家、もしくは村からの公認が得られる以前はすべて「恋愛」であって、その時期にはまだ「婚舎」はないと主張する。つまり、対象たる若い男女の関係を「未婚者」、「既婚者」という二つのカテゴリーのみで捉えようとしたのであり、その結果、「婚舎」の定義も大間知に比べて狭義のものとなっているのである。有賀は先述したような、若者たちの比較的自由な接近によって婚姻が開始され、その承認がきわめて事後承諾的・形式的に行われる沖繩などの例をあげることなく、家もしくは村の厳しい統制下において婚姻が成立する例のみをその対象として分析しようとしたのである。有賀のこのような婚姻の理解が、次節以下で述べる「寢宿」や「寢宿婚」の解釈にも大きな影響を及ぼしたと考えられるのである。

筆者も、婚姻の締結が一つの社会的行為である以上、その成立に際して周囲から何らかの承認を得る事は必須条件であり、またそれが新たな家の成立と不可分の関係にあるとする有賀の見解には異論がない。しかし、日本の民俗社会における婚姻の実態を見るかぎり、新たな家の成立以前に若い二人がとうてい「恋愛関係」とはいえない親密な、また定着度の濃い関係になっている例が多々見られるのであり、そのような二人を単なる「恋愛関係」とみなし、「既婚者」と社会的立場をまったく異にする「未婚者」と同一の範疇で捉えようとする有賀の見解には納得できない。やはり大間知のように「婚姻の成立」と「婚姻の開始」とを明確に区別して捉える必要がある。このような視座にたつて婚姻を理解することなくしては、性と婚姻の相関性やさらに民俗学の婚姻理論自体をも曖昧模糊なものにしてしまうように思われるのである。

### 三、寢宿と寢宿婚をめぐる



本節では前節までの「婚舎」およびその他の婚姻理論に依拠しつつ、本論の主要テーマである寢宿婚の問題に言及したい。

かつて大間知篤三は、昭和十二年の「日本結婚風俗史」における問題提起にもとづいて、昭和二十五年六月の「足入れ婚とその周辺」の中で伊豆利島の事例より、「私は寢宿生活から生ずる婚姻を『寢宿婚』と呼ぶことにしている。それは掣入婚および嫁入婚とともに、日本婚姻史におけるもっとも基本的な婚姻類型であり、きわめて古い歴史を持つものであろう。寢宿婚は掣入婚および嫁入婚とは異なり、本来家族制の外側に展開した婚姻であつたろう。そしてそれはおそらく、掣入婚によりまたとくに強力な夫権家族制を基盤とした嫁入婚によって、次第にその存在範囲を縮小されかつその存在力を滅殺されたものと想像できる」と述べ、はじめて「寢宿婚」なる婚姻類型を提唱し、かつその特質を明確にしている。この時点では、大間知は「寢宿婚」を「掣入婚」・「足入れ婚」・「嫁入婚」と同一平面上に位置づけて論じようとしたわけではなく、利島の事例をもって、「このような婚舎二段階制を伴うものとしても、私はその婚姻を足入れ婚以外の類型に属せしめようとは思わない。それも足入れ婚であり、足入れ婚の一種、すなわち寢宿婚要素を含んだ足入れ婚と見るべきものと思う」と述べていることからわかるように、彼がこの時特に主張したかった新たな婚姻類型としての「足入れ婚」のより正確な内容把握のために「寢宿婚」なる語をあえて用いたのであった。また一方、同年に書かれた「寢宿婚の一問題」の中で、大間知は「ここでは寢宿婚のうちの、婚姻者が婚姻成立の後も寢宿に泊りつづける習わしを対象として、いささか考えるところを述べたいと思う」として、薩摩甌島・杵岐・長門見島・伊豆三宅島・新島・利島の事例をあげ、寢宿に既婚者がなおも寢泊りするという実例を示しつつ、本稿の冒頭で紹介したような強烈な有賀喜左衛門批判を行っている。ここに大間知・有賀論争の口火が切られたのである。

ここで両者の論点を整理し、この論争のもつ意味について考えてみたい。大間知の有賀批判は、第一に有賀が『日

本婚姻史論』で「聾入婚はヨバイ婚であるから、女家に妻問うことを認められるときが結婚であって、それ以前の恋愛の時期にはまだ婚舎はない。結婚とともに妻を問う場合に妻の部屋は婚舎になったのである。嫁入婚の場合に、家には老夫婦がおり、新夫婦は気ままに寝るところがなくて、若者の寢宿に泊りに行ったりした風習があったので、寢宿を婚舎の集合のように考えようとしたのであるが、この二つの風習は、前者は聾入婚の場合に生ずるし、後者は嫁入婚の場合に生ずるのであって、その条件が違うことを考えなければならない」と述べたことに對して、大間知は、有賀が寢宿婚を聾入婚や足入れ婚との關係において考察することをしないで、もっぱら嫁入婚との關係においてのみ考察しようとした不備を厳しく指摘した。これに對しては、有賀も『有賀喜左衛門著作集』第六卷の「追記」の中で、大間知の指摘する不備がある程度認めている。大間知はさらに有賀の見解の内、次の三点に關して異論を提起している。すなわち、第一として婚舎の理解の相違に關して。第二として既婚者が寢宿に泊まる原因を、家が小さいことのみを問題にしていること。さらに第三として有賀が既婚者が寢宿に泊まる原因として、寢宿の規律のルーズさを問題とし、「これは若者の寢宿を婚舎に流用したにすぎない」との見解を提示していることに對してである。このうち、第一の婚舎の理解の相違については、前節で詳しく検討を加えたのでここでは省略するとして、問題となるのは第二、第三の点に關してであろう。この問題の論点は筆者が考えるに、新婚夫婦が何故寢宿に泊りに行かねばならなかったのか、換言すればその理由となるべき婚姻制・家族制の問題、さらに寢宿そのものの性格と社会的機能に対する基本的理解の相違にあるように思う。そこでこの点に關する両者の見解をやや詳細に検討してみたい。

そもそも大間知の婚姻理論は、「聾入婚」「嫁入婚」という二大婚姻類型論に依拠しつつ、さらに詳細な調査・分析を行うことによって、日本の婚姻にはきわめて多くのヴァリエーションがあり、それらを類型的に理解し、日本の婚姻を多元的に捉えんとしたところにその特質が認められる。この視点に基づいて、婚姻を家族制との関連において考察する必要性を提唱したことによって、民俗学の婚姻研究に新しい領域を開いた。その具体例として、伊豆諸島な

どの足入れ婚の分布する地域の家族制の特色として、親子二世代の夫婦が同居をしないという原則が見られることを指摘し、それが隠居家族制と密接に関わりがあることを明らかにしたことがあげられよう。この原則こそが、妻問い婚存続の大きな要因であり、さらにこの原則は、妻問い婚地域以外でも、例えば婚姻初期に嫁の長期の里帰りが行われるという習俗や、嫁が主婦となる日までその私財を頑強に生家に留めておくという習俗などにもその片鱗が見られることを再三提唱している。そして今問題としている寝宿婚も、この原則と大いに関連があることを示唆する。つまり、伊豆諸島などの妻問い婚地域において、寝宿と嫁家という婚舎の二段階制がとられることの背景には、嫁は主婦となる日まで嫁家には引き移らないという家族制の原則が多分に影響していると主張する。さらに、寝宿の機能について「寝宿のもっとも大きな機能の一つは、婚姻に関するものであり、宿親というものは何よりもまず、宿子の婚姻の成立を実の親から委託されているものである。（中略）宿親は婚姻前の宿子たちが、宿で婚姻のための営みをするのを、多くはきわめて寛容な態度で眺めているものである。その同じ宿親が、同じ宿子たちが結婚した暁に、膝もとで婚姻の営みをつづけることを、拒まなければならないような積極的理由は乏しい。結婚を機として多くの者が寝宿を退くことは、むしろ後々の風であつたろう。そしてそれを機として寝宿を退かしめる必要は、宿親||宿子の側にあつたというよりも、家||実の親側に新たなる条件が発生して、それを要求するにいたつたものと私は想像している。」と述べて、寝宿婚存論の妥当性を主張している。さらに、「宿親にはいろいろの型があつた。そのいわゆる統制も、少なくとも既婚の宿子たちもともにそのもとに寝泊りすることを拒むような性格のものとは限らなかった、と私は考えている。有賀氏にあつては、一色のものである。その流用説にいたっては私には、架空の統制論を大前提とした形式理論の論法としか思えない」と述べ、寝宿や宿親自体をも、多元的・類型的に捉えんとしているのである。このような大間知の思考法には、筆者もおおむねは賛同できるが、ただ問題となる点もなくはない。それは、一つには大間知が初期の論文において、寝宿婚を「寝宿生活から始まる婚姻」と規定していることである。もし寝宿婚をそ

のように定義してしまうと、若者宿や娘宿の存在するほとんどすべての地域において、寝宿婚が行われていたことになり、大間知のいわんとする寝宿婚の意味がまったく失われてしまうことになる。筆者は、寝宿婚とは、「若い男女の感情の接近によって、個別交際が開始された後、すなわち筆者のいう婚姻が開始された後に行われる簡素な婚姻承認の儀礼が終了して後も、なお夫婦が寝宿を婚舎に当てる形式の婚姻」と定義すべきだと思う。さらに、大間知が、寝宿の発生やその社会的機能の分析にもとづいた寝宿自体の分類を行うことなく、すべて一律に寝宿の存在形態を論じている点も若干気にかかる。この点に関しては、大間知自身、後の著作のなかで自ら反省をしているが、他の事象に対しては、綿密なる分析をもとに細かな類型化を行っている大間知だけに、筆者としては少し不満が残る。

一方、有賀喜左衛門の婚姻研究には、婚姻自体を村の、もしくは家によって統制されるべき社会関係と捉え、だれが婚姻を統制するのか、換言すればだれが婚姻を主宰するのかという点にその学問的興味が集約されたという印象を受ける。すなわち、有賀は、日本の村落をその構造的特色より、同族的村落と組的村落とに大別し、若者組や寝宿の機能や存在形態もこの村落類型論に依拠して考察している。有賀はまず、寝宿の存在形態を、「若者組や寝宿と併存する形態」と「最初から若者宿しかもたないもの」とに区別し、前者は「親方本家に末家(子方)の若者や娘が奉公(親方取り)する形態に源流があり、ここから発生したものであると考えられる」とし、後者を「組的村落に発生したものであろう」と規定し、若者たちが婚姻統制に参加し得たのは後者の例、すなわち組的村落においてであったとする。つまり、寝宿や若者組の機能をその背景にある村落構造との関連において理解し、かつ婚姻の形態をも把握しようとしているのである。このような理論にもとづいて、有賀は、大間知が「寝宿婚は本来家族制の外側に展開した婚姻であつたろう」と述べたことに對して、「そのような婚姻があつたかどうか非常に疑わしい。通例婚姻の主宰者は家であつた。家が主宰しない婚姻が村の主流として存在したことを想像することができらうか。(中略)寝宿婚とは誰が主宰したのであろうか。寝宿の宿親が主宰したものとすれば、宿親は聶の家や嫁の家より村における権

威のある家でなければならなかつたろう。(中略) 寢宿婚がもし存在するとしたら有力な宿親が存在する条件でなければならぬ。この条件は組的結合の村ではあり得ないから、それは有力家を本家とする同族の村落でなければならぬことになる<sup>⑧</sup>とし、その結果、「大間知氏の寢宿婚の説を追求してみても、それは親方取婚に合致しなければ成立することはできないと考えている」と主張する。さらに、大間知が、寢宿婚が西日本に多く見られると述べていることに對して、「これらの資料の多くは組的結合の支配的な村落であるからであり、よく見ればそれらは大間知氏が考へるような寢宿婚ではなく、男家と女家とが主宰し、最終的には男家の主宰する婚姻であつた。これらもすべて夫權的社會が主宰するものであつた<sup>⑨</sup>」と言ひ切る。以上のように、有賀はあくまで「同族の村落」「組的村落」という二つの村落類型論に依拠して、若者組・寢宿・寢宿婚を考察しようとしており、ここに社會學者たる有賀の學問的獨個性が見られる。

筆者は、有賀の理論は理論的整合性には富んでいるが、日本の多くの婚姻の事例をすべてこの理論枠で捉えようとするには問題があるように思う。大間知のいう「家族制の外側に展開した婚姻<sup>⑩</sup>」とは、その婚姻を主宰する者がないという意味ではなく、いゝば男家、女家いずれかの強力な統制下において、男女が結合し、その婚姻が許可されるという性格のものではなく、だれに監督されることなくごく自然に若い二人が結合し、やがて後に男家もしくは女家とその婚姻に承諾を与えるという形式のものを指しているのではないか。このような婚姻の存在は、婚姻とは常に村あるいは家によって主宰され、それが許可された時点が婚姻の成立であつて、それ以前はすべて恋愛にすぎないとする有賀には納得しかねるものであつたかもしれない。しかし、大間知の指摘するような、いつ開始されたとは周囲にはよくわからないような、きわめて自然な男女の感情的・性的結合が相当期間続き、子ができ、もしくは家を正式に譲られるという機会に初めて正式に夫婦たるべき承諾が与えられるという性格の婚姻が、沖繩をはじめ各地に見られたことは事實である。このような婚姻を規定した要因は決して一つではなく、多くのヴァリエーションがあつた。

ただ、それが多くの場合において妻問い婚という形態で表面化したことは事実であろうと思われる。また寢宿は、有賀のいうような同族的村落における親方本家に子方の若者や娘を奉公にやることに源流があるケースもあり得よう。

しかしまた、瀬川清子が述べているような「若い息子や娘が友人の間を心まかせに泊り歩いたのが、だんだんと固定したもの<sup>④</sup>」というケースもあり得たであろう。このような場合には、寢宿の生活から発展した婚姻は、決して有賀のいうような「親方取婚」ではなく、きわめて自然的な男女の結合が徐々に固定化され、やがて双方から承諾を得て定着してゆくような、いわば「自然結合婚」とでもいふべき性格のものであったろう。このような婚姻こそが、妻問い婚の本来の姿でもあり、「きわめて古い歴史を持つ」と大間知に言わしめた婚姻であったのではなからうか。

以上、大間知と有賀の婚姻理論を中心に、問題とすべきいくつかの点について若干の考察を加えてみたが、筆者は前節でも述べたように、若者たち内部ではもうその二人を夫婦たるべき関係と認めているにもかかわらず、村もしくは家から正式な承諾を受けていない男女関係を、有賀のように単なる「恋愛関係」と捉えることにはどうしても抵抗がある。それは、そのような男女の結合関係は、婚姻関係としては未確定な要素を多分に残していることは否定できないが、これを単なる恋愛と規定するにはあまりにも性格が異なっているように思われるからである。前節であげた対馬の例などは、一応夫婦としての承諾が得られ、娘は嫁として嫁家に引き移ってくるが、初子の妊娠五か月に行われるハラマツリまでは、二人の夫婦としての関係はきわめて定着度の弱いものであり、その意味においては有賀のいう「恋愛関係」と事実上異なるものではない。つまり、村もしくは家の承認とは、その婚姻関係を完全に決定する要因とはなり得るものではなく、そこでより重要なのは事実としての婚姻の定着の度合いではなからうかと思う。そのように考えると、一般的嫁入婚においてさえも、婚姻初期の夫婦がきわめて流動的な立場におかれる例があることは、前節で述べた通りである。このようなケースにおいて、その婚姻が最終的に安定・定着するのは、子の誕生、もしくは家を譲られるときであった。筆者は、婚姻関係を規定する要素として、周囲の承認の有無や居住規制よりも、その

関係の定着度を重視したい。すなわち、妻問い婚においては、婚姻が安定・定着し、その関係が完全に確定する時に、嫁の引き移りが行われることが多く、その時はすなわち嫁が主婦となる時であった。そして、ここに親子二世代夫婦が同居をしないという原則が結びつく時、隠居家族制が具現するのである。一方、嫁入婚においても、嫁の嫁家への引き移りが行われた後も、当分の間、嫁は完全な嫁家の人とはなり得ず、流動的な立場をとるのであり、この立場は、いわば妻問い婚における嫁家引き移り以前の嫁の立場に等しいといえる。そして、おおむね子の誕生を機会に、嫁は主婦となり、そしてその婚姻関係は最終的に定着・確定するのである。

以上の理論的前提にたつて、大間知があげた寝宿婚の事例を見てみると、伊豆利島、伊豆三宅島、伊豆新島、長門見島、薩摩甕島の五例のうち、三宅島を除いて他は例外なく初子の誕生を機会に婚舎を嫁家もしくは嫁家に移している。<sup>⑤</sup>つまり、婚姻初期のまだ比較的流動的な立場にある夫婦のみが寝宿に寝泊まりしているのであり、婚姻が進行し、その関係が定着するにしたがつて婚舎を寝宿から別の場所へ移している。したがって、寝宿婚においては、婚姻関係の進行に伴って、そのつど婚舎を移すのが通例であり、それに伴って二人の関係も安定・定着度を増すと同時に、夫婦は舅もしくは嫁の家に徐々に帰属してゆくものと考えられる。大間知が寝宿婚をして「家族制の外側に展開した婚姻」<sup>⑥</sup>と規定した根拠は、実はここにあったのではないかと想像できるのである。

#### 四、年齢階梯制理論と寝宿婚——婚姻の進行プロセスと婚姻関係の定着

以上述べてきた寝宿婚に関する諸問題は、筆者は基本的には、社会人類学の年齢階梯制の理論を応用して理解すべきであると考ええる。年齢階梯制とは、戦後、岡正雄を中心とした社会人類学者たちが、提唱した一つの社会構造原理で、近年、江守五夫・蒲生正男・村武精一・坪井洋文などによって実証的・理論的検討がなされている。年齢階梯制の研究は、従来の社会学において議論されてきた、日本を対象とした村落類型論を再検討するという視点より研究が

開始され、よって以後も、年齢階梯制の研究は村落類型論をめぐる議論の中で展開されてきた。断っておくが、ここでこれまでの村落類型論をめぐる議論を逐一再検討することは、決して筆者の意図するところではないし、本論の内容からしてふさわしい論述法だとも思わない。にもかかわらず、ここであえて年齢階梯制の問題を取り上げる根拠は、一つには、寢宿婚が現実に民俗慣行として存在した地域が、例外なく年齢階梯制的要素を具備する村落であること。二つには、本稿の主題である大間知・有賀論争を理論的に分析し、ひいては冒頭で示した性と婚姻の相関性を究明するためには、年齢階梯制理論を応用することが、もっとも有効であろうと筆者が認めるためである。

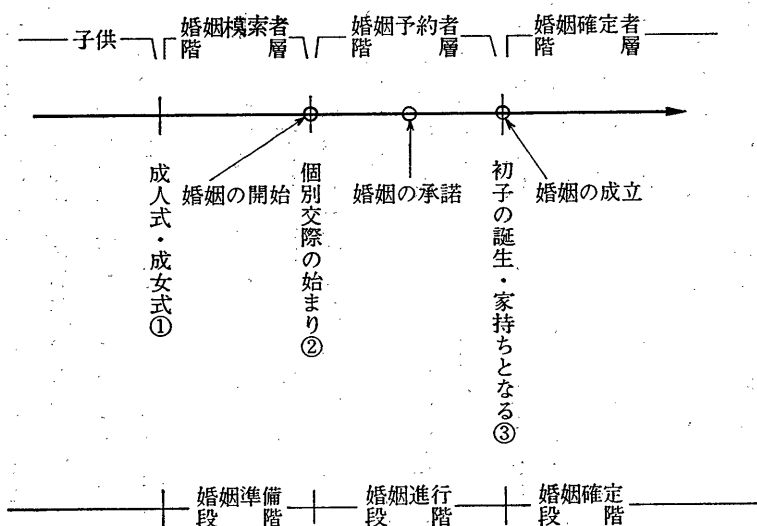
ではここで江守五夫の説を引用しつつ、年齢階梯制の定義およびその特色について概略を紹介したい。江守によると、年齢階梯制とは「社会の成員を年輩によって区分し、同年輩の者を階層化もしくは集団化するとともに、それによって生ずる諸々の年齢階梯 (Aiers klass) もしくは年齢集団 (Aiersgruppe) の間に年輩の上下にもとづく指揮||服従の関係を設定することによって社会全体の統合を期する制度」<sup>④</sup>であると述べる。さらにその社会構造的な特色として、第一には「家族の構成員がこれら年齢的諸階層ないし諸集団にそれぞれ配分されることによって、村落の社会統制は家の殻を透して直接に家族構成員に及ぶのであり、家族の封鎖性||排他性が希薄なものたらしめられるのである」<sup>⑤</sup>とし、このような村落社会は、川島武宜が論じた「家拡散型村落」に相当するといふ<sup>⑥</sup>。第二に、年齢階梯制村落の重要な要素は「村落内婚規範」<sup>⑦</sup>であり、その結果、「村落共同体がそれ自体一個の血縁的な共同体——マードックのいわゆる《clane》——たるの性格をおび、(中略) 共同体の社会的統合を強め、その内部における単系的な出自集団——それは共同体成員の分化をもたらずが——の発生を可及的に阻止する」という。また第三に、「このような単系的な親族集団の未成熟という条件と相まって、家族においても直系家族とはむしろ反対な性格——異世代を空間的に隔離しようとする傾向——が現れるのである」<sup>⑧</sup>とする。さらに、「家拡散的な社会構造と相まって、家夫長制の進展を阻止する作用をいとな」<sup>⑨</sup>み、このような条件のもとに「自由結婚の習俗」<sup>⑩</sup>が存在すると述べる。そして、「婚前交渉の過



程をとおして選択され、若者集団自体の承認をうけた配偶者については、当事者の親も異議を唱えることは認められなかった。親は、子がなした配偶者の選択を自動的に追認するだけであつた<sup>⑧</sup>という。以上江守の説に従つて年齢階梯制村落の社会構造的特色を示したが、これらの特色は、すべて大間知があげた寢宿婚が存在する地域の社会的特色と一致する。このことは、江守も述べているように、寢宿婚は年齢階梯制的村落においてのみ成立しうる民俗慣行であり、よつて、その内容分析を行うためには、年齢階梯制の理論を用いることが最適であることを示唆しているといえよう。

さて、前節までで論じた寢宿婚に関する種々の問題、特に大間知と有賀の見解の相違は、筆者は年齢階梯制における階梯区分に起因するのではないかと考える。すなわち、従来の理論における階梯区分は、一般に「子供」、「父母」、「祖父母」の三世代階層として理解されていた<sup>⑨</sup>。江守は、これに若干修正を加え、「子供」の階層を成人式を経た者と経ていない者とに分け、結果として「未成年者階層」、「青年独身者階層」、「中年層」、「老年層」の四区分として捉える必要性を提唱している<sup>⑩</sup>。実際の村落生活において表面的に機能しうる階層は確かにこの四階層であり、その意味においては、江守の階梯区分は一応、的を得たものといえる。しかし、筆者は年齢階梯制の理論を用いて、婚姻の問題を分析する際には、江守のあげた四区分をさらに再区分する必要があると考える。つまり、江守の区分では、婚姻を基軸におくと「青年独身者階層」Ⅱ「未婚者階層」、「中年層」Ⅱ「既婚者階層」という二階層区分しかなされていらない。これでは、前節まで述べてきた「婚姻の開始」と「婚姻の成立」とを区別して捉えんとする視点はまったく反映されない。筆者は、「青年独身者階層」（未婚者階層）から「中年層」（既婚者階層）までについて、全体を三区分し、結果として、<sup>⑪</sup>婚姻模索者階層（婚姻準備段階）、<sup>⑫</sup>婚姻予約者階層（婚姻進行段階）、<sup>⑬</sup>婚姻確定者階層（婚姻確定段階）として捉える必要があろうと考える。すなわち、図Aのように、未成熟な「子供」は成人式（成女式）を経ることによつて、若者集団に加入し、男女それぞれ将来の婚姻を予測した交際を開始する。この時点

【図A】〈古式の婚姻における進行プロセスと階層区分〉

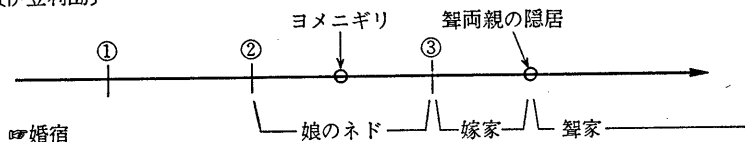


で、「子供」の階層から婚姻模索者階層（婚姻準備段階）に移行するのであり、ここに一般にいう「ヨバイ」の習俗が生まれる。そしてその舞台は「寝宿」であることが多い。そのうち特定の男女が互いの感情的接近によって、より親密度の濃い個別交際を開始するようになる。この関係は決して当該社会（ムラ）から正式に公認された関係ではないが、若者たちは二人を婚姻を前提とした特定の関係と認め、当人たちもそのように意識するのであり、この時点において二人は婚姻予約者階層（婚姻進行段階）に移行する。筆者は、この時点が「婚姻の開始」と捉えたい。この段階の二人は地域によっては特にナジミなどと呼ばれ、婚姻関係としては未確定な要素はぬぐいされないにしても、成人式を迎えたばかりの純然たる婚姻模索者階層とは性格を異にする。また、この段階になると、男女双方の貞操観念も一段と強固なものとなるのが通例である。このことは、このような段階において、一度に複数の男性と関係を持つ女性を、例えば池間島ではミヤラビ<sup>⑤</sup>、沖縄本島ではサンガナーなどとい

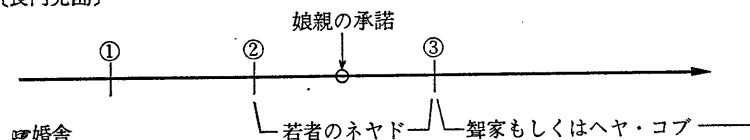
う蔑んだ名で呼ぶという事実からもうかがうことができる。これまでの各地の事例報告によると、この時点を過ぎてほでない頃に、男性もしくは女性の親からの簡単な承諾が与えられることが多い。しかしこの承諾は前節までで繰り返し述べてきたように、家父長制下における一方的な「婚姻の承諾」とは性格を異にし、いわば若い二人の關係に事後承諾を与えるという性格のもと理解すべきであらう。ここでいわゆる「婚姻開始儀礼」ともいうべきわめて簡素な儀礼が行われる。それは、沖縄では二合酒、伊豆ではアシイレ・ヨメニギリ、甕島ではサンビヤカレーなどと呼ばれるが、特に定まった名称がない場合もある。一般には、それまで寢宿を婚舎としていた場合でも、この「婚姻開始儀礼」を機に、婚舎を嫁家もしくは嫁家に移すのが通例である。しかし、それ以後も、なお引き続き寢宿を婚舎とするケースがごく少数であるが存在するのであり、それを筆者は「寢宿婚」と定義すべきであると思う。このような状態がしばらく続き、初子の誕生、もしくは嫁が家持ちとなって正式に所帯を持つ機会に、一般的な妻問い婚においては、婚舎を嫁家に移し、嫁は主婦となるのであり、隠居慣行が濃厚な地域ではこの機会に、嫁両親は母屋を息子夫婦に譲り、別棟に隠居する。すなわち隠居復世帯の成立である。筆者はこの機会をもって「婚姻の成立」と理解すべきだと考える。(ただし、図Bのように、伊豆利島ではこの機会に婚舎は寢宿から嫁家に移されており、利島において嫁が嫁家に正式に引き移るのは、随分遅れる。利島では嫁両親の隠居の時期が他の地域と比べて随分遅く、その結果、嫁両親の隠居が嫁引き移りの絶対条件となっている利島においては、婚舎が三段階にわたって移動するという一種独特の婚姻居住規制が見られる。)この嫁引き移りの機会に、盛大な社会的披露が挙行され、嫁と嫁はいよいよ正式に、家からも村からも公認された夫婦となるのである。筆者は、これ以後の二人を、婚姻確定者階層(婚姻確定段階)とみなす。ここにおいて、男女はより強い貞操観念を強要され、その婚姻関係はいよいよ安定の域に到達するのである。また、先に述べた羽越地方のシウトノツトメや、北陸のセンタクガエリ等の習俗も、この時点で打切りとなり、それまで流動的な立場にあった夫婦が嫁家にはば帰属することになる。

【図B】《寝宿婚における婚姻進行の実例》

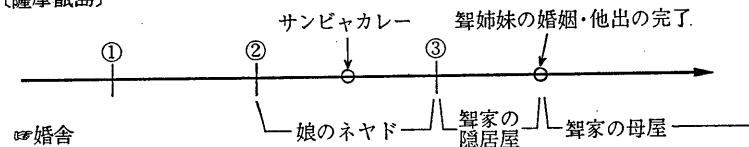
○〔伊豆利島〕



○〔長門見島〕



○〔薩摩甕島〕



※図中の①、②、③は【図A】の①、②、③に対応

以上、年齢階梯制理論を応用した婚姻進行過程に関する筆者の理論のあらましを示した。ここで注意すべきことは、筆者のいう「婚姻予約者階層」つまり「婚姻進行段階」の期間と、いわゆる家観念とは常に相互に関連しあっているということである。つまり、家観念が弱い状況においては、婚姻進行段階の期間は相当長く、家観念の強化に伴ってこの期間は徐々に縮小され、ついには「婚姻の開始」と「婚姻の成立」が一体化した形で同一の儀礼として挙行されるようになる。つまり、一般的嫁入婚においては、嫁をいち早く聾家へ引き移らせることによって聾家に帰属させ、聾家の家風になじませることが要求されるのであり、またただちに盛大な社会的披露を挙行することによって、聾と嫁の婚姻関係が成立したことを当該社会に公然化しようとする傾向が強いのである。ここにおいては、

の論理<sup>々</sup>だけが重要視され、若い男女の婚姻に対する自由意思は著しく制限されてしまう。しかし一方で、同族結合が比較的強固であり、また当然のこととして家觀念の強い村落においても、また一般的嫁入婚が支配的な村落においても、嫁身分の明確な変化や婚舎の実際の移動は見られないまでも、家族内もしくは村落内における夫婦の立場は、個々の段階を経て徐々に「婚姻確定者階層」へと移行してゆくことと捉えることもできる。例えば、初子の誕生の際に、その子の村入りもしくは氏子入りの儀礼が村落全体の儀礼として行われるケースは各地で見られるが、その機会に、ムラから子の両親の夫婦としての正式な承認がなされるという例が滋賀県その他の地域で聞くことができる。<sup>⑧</sup>これは筆者が直接調査したものではないので、今の段階で確定的なことはいえないが、宮座や頭屋の祭祀儀礼として行われているものの中にも、村落による夫婦の婚姻承認を目的とした通過儀礼的要素が内在している可能性は十分にありうるのではないかと想像している。これは筆者の今後の課題である。

以上の理論的前提にたつて、今一度寝宿婚をめぐる大間知・有賀論争を眺めてみると、次のような解釈が可能ではなからうか。すなわち、有賀は寝宿は本来未婚者のためのものであり、ゆえに既婚者が泊まることは単に寝宿を婚舎に流用したにすぎないと主張した。この見解には筆者も基本的には同感である。また、大間知は各地の寝宿婚の事例をあげ、既婚者が寝宿を婚舎とすることは決して寝宿の流用などではないと主張した。筆者はこの主張にも賛同したい。これは決して矛盾ではない、なぜならば、大間知のいう「既婚者」とは筆者のいう「婚姻予約者階層」を指しているのであり、有賀のいう「既婚者」とは子の親となった、もしくは家持ちとなつ筆者のいう「婚姻確定者階層」を指しているからである。つまり、両者が共に使用した「未婚者」「既婚者」という二つのカテゴリーの内容が実は二人の間で統一されていなかったことがこの論争の一つの要因ではなからうか。筆者に言わせれば、このような用語の定義のくい違いは、あくまで両者が「未婚者」「既婚者」という二つのカテゴリーのみで婚姻を解釈しようとしたために生じたものである。現に、大間知のあげた寝宿婚の事例において、寝宿を婚舎としていたのは、子供を持

たない夫婦ばかりであり、初子の誕生によってほとんど例外なく婚舎を嫁家もしくは贅家に移している。筆者のいう婚姻確定者階層<sup>レ</sup>がなお寢宿を婚舎とする例は見られないのである。

## 五、むすびにかえて

一昔前になるが、「婚前交渉」なる行為の是非について、よくマスコミその他によって議論された時代があった。今日ではこのような議論はやや下火となっている感があるが、婚姻前の若い男女の性交渉がどうあるべきかについては、統一的な見解が示されているわけではない。また、ひとたび二人の間に子供ができようものなら、結婚式を挙げたか挙げていないかということが、ことうるさく詮索され、道徳的な次元以外に、法的にも、婚姻届の提出という行為の有無によって、生まれる子供の社会的立場は大きく異なるのが現実である。近年、欧米風の価値観に基づいて、「性の開放」等ということが一部の人たちの間で唱えられている。しかし一方で、古式の価値観に基づく儒教的・武家社会的性觀念が根強く社会に生きつづけていることも事実である。このような性觀念の多様化した時代に、若者たちの性の問題を考え、将来に向けて一つの方向づけを行うためには、日本のかつての民俗社会において、性と婚姻がどのように捉えられていたのかを正確に認識し、それを再検討することが必ず必要となる。そのための資料を提供し、検討のたたき台となるべき理論を提示することは、民俗学の今日的義務ではなからうか。本小稿は、そのような意味を含めつつ、大間知篤三と有賀喜左衛門との寢宿婚をめぐる論争を題材として、筆者の考えるところを述べたつもりである。しかし、性と婚姻の相関性という課題は、洋の東西を問わず、古くから多くの分野で議論されてきた問題であるだけに、この課題の持つ意味の大きさを浮彫りにすることすら満足に成し得なかったのではないかと、いささか不安が残る。従来の民俗学では、こと性についてはあまり議論の対象とされることは少なく、よって未解決の問題を多く抱えたままになっている。その中の、ほんの些細な一つの問題点であっても、本小稿によって何らかの議論

のきっかけが芽生えたとすれば、筆者にはつては望外の喜びである。

最後に、本小稿の内容をふり返って、筆者の今後の課題として検討を要する点を整理してみたい。第一に、寝宿婚の舞台であるネヤドそのものの機能や存在形態をめぐる詳細な分析・検討が欠落してしまったという点であろう。これは、寝宿婚を論じるためにはいずれ取り組まなくてはならない課題であろうと思う。第二に、ネヤドと同様に、年齢集団としての若者組自体の分析・検討を行うことも今後の必須課題であると思われる。第三に、婚姻進行過程の理論的検討を行う際に、年齢階梯制理論を応用するという方法をとったが、今日まで村落構造原理として位置づけられてきたこの理論の一部のみをもって、婚姻進行過程の解釈に適用したという筆者の方法論に問題があるのではないかということが批判されるかもしれない。これは筆者が、村落社会の全体的構造から婚姻形態や家・家族の問題を論じようとせず、ただ婚姻関係の進行と定着という視点において年齢階梯制原理を応用したことに原因があらうということとは筆者も承知しているつもりである。ただ、大間知・有賀の寝宿婚論争の理論的分析を行うことを主眼にいたたために取りえた方法なのであって、村落社会の全体構造の把握を前提とした視点にもとづいて、婚姻・家・家族の民俗学的検討を行うことは、筆者の当面の必須課題であると考えている。第四に、机上の理論に先走りすぎて、肝心の具体的民俗事象の検討があまりなされていないという批判を受けることが予測される。この点に関しては、第四節でも述べたように、近江・若狭・越前を中心とした地域での、この問題に関する実証的調査を近々実施する計画である。それを終えた段階で、何らかの解答を示す予定である。

これらの問題点以外にも、まだまだ多くの課題が残されているであろうことは筆者も想像に難くない。諸学兄の批判・叱正を受けながら、今後の研究の発展につなげてゆきたいと思う。

#### 註

二七二ページ

① 大塚民俗学会編『日本民俗事典』（弘文堂、一九七二年）

② 大間知篤三「日本結婚風俗史」（『大間知篤三著作集第二

卷、未來社、一九七五年）二四二ページ

③ 有賀喜左衛門『日本家族制度と小作制度』（有賀喜左衛門著作集第一巻、未來社、一九六六年）一四三ページ

④ 有賀喜左衛門『日本婚姻史論』（有賀喜左衛門著作集第六巻、未來社、一九六八年）二二四ページ

⑤ 大間知篤三「寢宿婚の一問題」（同著作集第二巻）四五〇ページ

⑥ 大間知前掲書、四六〇～四六一ページ

⑦ 大間知前掲書、四五七ページ

⑧ 有賀喜左衛門「追記」（同著作集第六巻）三九九～四二二ページ参照

⑨ 柳田國男「氏神と氏子」（定本柳田國男集第一巻、筑摩書房、一九六九年）四〇五ページ

⑩ 柳田國男「敬神と祈願」（定本第一巻）四三五ページ

⑪ 柳田國男「聳入考」（定本第一巻、筑摩書房、一九六九）七三ページ

⑫ 大間知篤三「足入れ婚とその周辺」（同著作集第二巻）四〇一ページ

⑬ 大間知前掲書、四〇一ページ

⑭ 大間知前掲書、四〇〇ページ

⑮ 大間知前掲書、四〇一ページ

⑯ 対馬の婚姻についての詳細は、大間知篤三「対馬のテボカライ嫁」（同著作集第二巻）を参照のこと

⑰ 奥野彦三郎『沖繩婚姻史』（国書刊行会、一九七八年）一

三ページ

⑱ 奥野前掲書、二三八ページ

⑲ 奥野前掲書、三〇ページ

⑳ 佐藤光民「羽越国境地方の婚姻制——シユウトノツトメを中心として」（『日本民俗学』第三巻第四号、一九五六年）

㉑ 有賀喜左衛門『日本婚姻史論』（同著作集第六巻）二二四ページ

㉒ 有賀前掲書、二二二ページ

㉓ 大間知篤三「足入れ婚とその周辺」（同著作集第二巻）四〇九ページ

㉔ 大間知前掲書、四〇九ページ

㉕ 大間知篤三「寢宿婚の一問題」（同著作集第二巻）四〇五ページ

㉖ 有賀喜左衛門『日本婚姻史論』（同著作集第六巻）二二四ページ

㉗ 有賀喜左衛門「追記」（同著作集第六巻）三九九～四二二ページ参照

㉘ 有賀喜左衛門『日本婚姻史論』（同著作集第六巻）二二四ページ

㉙ このような大間知の民俗に対する理解の方法については、上野和男が以前より指摘している。（上野和男「昭和初期における家族研究の展開——柳田國男と大間知篤三を中心として」、『家族史研究』創刊号、大月書店、一九八〇年）

㉚ 大間知篤三「寢宿婚の一問題」（同著作集第二巻）四六〇



ページ

③① 大間知前掲書、四六一ページ

③② 大間知篤三「足入れ婚とその周辺」(同著作集第二巻) 四〇九ページ

③③ 大間知篤三「婚姻」(『日本民俗学大系』第三巻、平凡社、一九五八年) 一九八―一九九ページ参照

③④ 有賀喜左衛門『日本婚姻史論』(同著作集第六巻) 一九七ページ

③⑤ 有賀前掲書、一九八ページ

③⑥ 有賀前掲書、一九七ページ

③⑦ 有賀前掲書、一九八ページ

③⑧ 大間知篤三「足入れ婚とその周辺」(同著作集第二巻) 四〇九ページ

③⑨ 有賀喜左衛門「追記」(同著作集第六巻) 四一三ページ

④① 有賀前掲書、四一八ページ

④② 有賀前掲書、四一九ページ

④③ 大間知篤三「足入れ婚とその周辺」(同著作集第二巻) 四〇九ページ

④④ 瀬川清子『若者と娘をめぐる民俗』(未来社、一九七二年) 二五一ページ

④⑤ 大間知篤三「足入れ婚とその周辺」(同著作集第二巻) 四〇九ページ

大間知のあげた五地区の事例の概略をここに紹介したい。

「利島では、十五歳で成年式をすませば娘はみなネドに泊り

寝宿婚と婚舎をめぐる民俗研究

に行ったのであり、男の宿は村に一カ所であったが、ネドが数多くあったことなどの詳細は本誌正月号『民間伝承』一四巻一号に述べたとおりである。一つのネドには年齢の違う女性が数人ずつ泊まっていたのであるが、姉妹が同宿することはなかった。宿の規律はよくとのい、そして婚姻の相手を選ぶことはまったく若い男女の自由意思にまかされていた。婚姻成立式は鞆方の祝いのみからなり、以後嫁は鞆方の仕事をし、鞆方で食事をするが、泊まるのはそれ以前と変わらずネドであった。初産を機会として『彼女はネドオヤから実のオヤに渡され』、それからは嫁の生家に婚舎が属することになる。その状態は原則として鞆の親が隠居するまでつづき、嫁は主婦となる日に鞆方へ引き移りを完了する。」

「三宅島では女のネヤドと男の宿とは別々であった場合が多く、宿親の監督はよくゆきとどいていた。結婚しても親が隠居して世帯を渡すまでは、多くは妻の前からのネヤドに泊まるのであるが、夫の宿の方に泊まる場合もあった。子供が五、六人にもなつて、なお泊りに出ている夫婦があった。(最上孝敬氏話)」

「新島では、新夫婦ができると、鞆方親が隠居屋へ別居する習わしで、それができない事情にあると新夫婦はネヤドへ泊りにゆく(尾佐竹猛氏「伊豆新島の話」『郷土研究』四巻四号)」

「長門見島では、女の寝宿はなく、男のネヤドに若衆たち四、五人ずつ泊まった。宿親には実の親に相談できぬことま

で打ち明け、絶対服従であつた。ナジミができると、適当な時期に宿親が実の親に話してくれる。宿親が酒を携えて娘の親に縁談を申し入れる。それで婚姻は認められて、その夜から女は男の宿へ嫁として泊りに行く。嫁は昼は聶方の家で働き、夜食の後始末をしてから宿へ行く。未婚者既婚者一緒だったり、二夫婦三夫婦一緒だったりする。新夫婦は初子の臨月になれば宿を退くのであるが、それまでに聶方の親は借家してでも隠居する習わしであつた。多くは屋敷内に隠居屋を建てるとか、建てましをするとかし、そこをへやあるいはコブと呼ぶ。親が六十歳前なら息子夫婦をへやに置き、自分らが母屋に住むこともあるが、かかる場合には親が年をとつて隠居する際に入れ替わることもある。父息二夫婦が同居することを恥じる気持ちが強い（瀬川清子夫人『見島聞書』）「薩摩飢島の平良〔上飢村〕では、男女とも小学校の上級になると他家へ泊りに出る。女の宿をネヤド、男の宿をニセヤドと呼び、数人ずつ合宿した。男は通例同宿のドシに取り持つてもらひ、好きな女のもとへヨバイをするようになる。（中略）こうしてナジミ関係ができる。男のもっとも親しい一番ドシが、適当な時期に男の両親にナジミ関係を打ち明けて承諾を得てくれる。それから普通男方の伯父ぐらゐが縁談を申し込む。女方で承認すれば、それより二、三日後に、この島で俗にサンビヤカレーと呼ばれる婚姻成立式が聶方で催される。その式がすむと嫁は帰り、以後も従前どおりネヤドに泊まる。聶も従前どおりその女の所へ行つて泊まる。翌日

からは嫁は聶方へ来て水を汲み、聶方の仕事をする。初聶入りはサンビヤカレーの三日後か七日後である。（中略）かくて夫婦となつた二人は、そのネヤドに普通初産まで泊まることが多いのである。嫁が聶方へ引き移る時期に深い関係を持つのは、聶方における隠居屋の有無である。（後略）

（以上すべて大間知篤三「寝宿婚の一問題」より引用）

以上五事例の内、三宅島のみは子供の誕生以後も、夫婦がネヤドに泊るという記述があるが、はたしてそのような例が一般的であつたかどうか、検討を要するに思われる。また、これらの婚姻に関する報告は、大間知氏のもの以外に、瀬川清子『若者と娘をめぐる民俗』（詳細は前掲）、蒲生・坪井・村武『伊豆諸島』（未来社、一九七五年）、八木透『足入れ婚と隠居複世帯制』（『季刊人類学』一二一四、講談社、一九八一年）、八木透『民俗学における婚姻研究の課題——新しい婚姻類型論構築に向けて』（『京都民俗』第四号、一九八六年）を参照のこと。

④⑥ 大間知篤三「足入れ婚とその周辺」（同著作集第二巻）四〇九ページ

④⑦ 江守五夫『日本村落社会の構造』（弘文堂、一九七六年）一四八ページ

④⑧ 江守前掲書、九〇ページ

④⑨ 江守前掲書、九〇ページおよび、川島武宜『イデオロギーとしての家族制度』（岩波書店、一九五七年）二九九～三二三ページ参照

- ⑤⑩ 江守前掲書、九〇ページ
- ⑤⑪ 江守前掲書、九〇ページ
- ⑤⑫ 江守前掲書、九一ページ
- ⑤⑬ 江守前掲書、九二ページ
- ⑤⑭ 江守前掲書、九二ページ
- ⑤⑮ 江守前掲書、九三ページ
- ⑤⑯ 江守五夫『日本の婚姻』（弘文堂、一九八六年）三五四～三五六ページ、および江守『日本村落社会の構造』一五五ページ参照
- ⑤⑰ 江守『日本村落社会の構造』一五六～一五七ページ参照
- ⑤⑱ 個別交際を始めた男女を「ナジミ」と呼ぶ例は、伊豆諸島、長門見島、薩摩甕島など、寝宿婚の習俗が見られるほとんどの地域で報告されている。
- ⑤⑲ ミヤラビとは、池間島では「妾」を意味する言葉であるという。（奥野彦三郎『沖縄婚姻史』一五ページ参照）
- ⑥① サンガナーとは、多情な女を指し、その語源は「三貫即ち六錢を人称化したもので淫売を意味した」という。（奥野前掲書、一六ページ参照）
- ⑥② 滋賀県野洲町で野洲町史編纂事業の一環として民俗調査を行ってきた東条寛氏（関西大学文学部講師）によると、野洲町内にオボヤケ、あるいはカカヨメイリと称する儀礼がかつて行われていたという。

〈追記〉 本小稿は一九八六年十一月二十九日より三十日にか

寝宿婚と婚舎をめぐる民俗研究

けて、武蔵大学で行われた比較家族史学会第一〇会研究大会において、筆者が「日本民俗学における性と婚姻の研究視角」と題して口述発表を行った原稿にその後修正、加筆して完成させたものである。学会当日には、茨城大学竹田旦教授、武蔵大学渡辺欣雄教授、東京大学稲本洋之助教授、千葉大学江守五夫教授、専修大学鎌田浩教授他多くの方々に有益なる御助言を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

